『栄花物語』続編における後三条院の位相

中村成里

一、はじめに

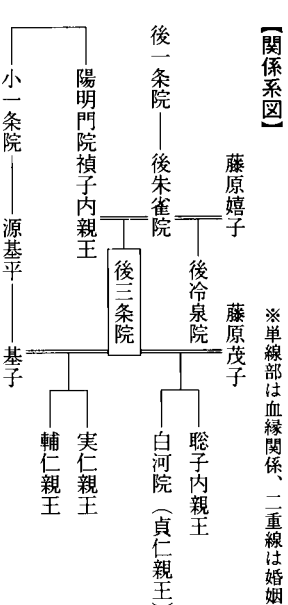
後三条院に対する見方、捉え方を通時的に俯瞰してみると、まず大江匡房は聖主と礼讃し、『続本朝往生伝』や『遊女記』、願文集等において敬慕の文辞を記している。さらに『古事談』巻一・五九話には応神天皇の王冠が頭に合ったことを自讃する逸話や、六二話には「延久の善政」とあり、更に巻一・七一話には険悪な関係であった藤原頼通によって「末代の賢主」と讃えられ、中世において後三条院の治世を聖代視することは、ほぼ自明といってよく、[1]これらは匡房の作品の影響によるものであると考えられる。

しかし、院政期の共時的言説を相対化させてみるならば、後三条院に対する『栄花物語』続編（以下、続編と記す）の立場は、大江匡房のそれとは明らかに方向が異なっている。ところが、従来は史料としてのみ扱われがちであった続編そのものにおける天皇像・王朝像を定位する試みは、いまだ着手されてはいない。新日本古典文学全集『栄花物語』（山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注。以下、新全集と記す）頭注は、後三条院が主たる叙述の対象となっている巻三十八「松のしづえ」における記事同士の連関の乏しさと、後三条院像及び記事の一貫性のなさを指摘するにとどまっていて、続編における後三条院の位相は、ひどく曖昧なものとみなされるにすぎなかった。また『栄花物語』研究史においても、成立論に関わる議論はなされたが、続編における後三条院像を積極的に読み解こうとする論はなかった。[2]

新全集頭注は、巻三十八の構造が、後三条院の源基子寵愛から、その崩御までで完結していることを指摘している。[3]すなわちこの巻は、編年体というよりも帝紀に近い形態なのである。巻の構造が他巻とは差異化され、特別視されることで、後三条院という存在が異質な天皇であることが認識されていた可能性がある。本稿では、続編における後三条院像を探り、他作品と比較検討することで、具体的にどのような位相にあるのかを見定め、作品の立場を明らかにしたい。以下、本文の引用は新全集による。なお、左

図の系図を参考にされたい。

【関係系図】



※単線部は血縁関係、二重線は婚姻関係

（群書類従『本朝皇胤紹運録』による）

二、後三条院像の諸相――続編の立場――

続編において、後三条院・後三条朝はどのような評価がなされているのかを確認した後、同時代資料と比較検討していこう。

後三條院と摂関家との関係に注目すると、藤原頼通との不仲が巻三十七「けぶりの後」の結びに「東宮と御仲あしうおはしましければ」（四二〇頁）と記されている。特に巻三十八「松のしづえ」に移行する前提として、頼通との険悪な関係があった。頼通は後冷泉朝の末期には宇治に籠居している。

しかし、頼通の子の師実との関係は良好であり、延久三（一〇七一）年の源基子腹の実仁親王の五十日の祝いの記事には、「左の大殿抱きたてまつらせたまひて、上のくくめたてまつらせたまふほど、抱き移したてまつる御乳母など、なまよろしからんはいとわりなかるべし」（四三九頁）とあり、「左の大殿」師実が実仁親王を抱き、後三条院が餅を口にふくませる場面が見られる。同様に実仁親王内裏参入の記事では、

東宮よりほかに男宮おはしまさねば、心ことに若宮を思ひ申させたまへば、この女御殿をも重々しくもてなしきこえたまふもことわりなり。――中略――①抱きとらせたまひて、まだいともげなき御ほどを、うつくしみたてまつらせたまふほどあはれにめでたし。②いつしかときたなきわざをしかけたてまつらせたまへれば、御衣奉り替ふるほどもめでたし（四三〇～四三一頁）。

とあり、傍線部①では後三条院が実仁親王を抱き上げ、傍線部②には、『紫式部日記』の敦成親王誕生記事を髣髴とさせるくだりが見られる。また、実仁親王を抱き上げた人物はもう一人いた。後三条院皇女で白河院の同母姉（母は藤原茂子）の一品宮聡子内親王であり、「一品宮もこの宮をいみじくうつくしきものとに思ひきこえさせたまひて、抱き持ちておはします」（四四二頁）と記される。聡子内親王は後にも、「女御殿、一品宮など嘆かせたまふさまことはりなり」（五一四頁）と実仁親王の死を悲しむ人々の輪の中に位置している。その後、聡子内親王は物語から姿を消す。後述するが、実仁親王の母である源基子は小一条院の孫にあたり、もとは聡子内親王に仕える女房であった。基子の入内と皇子誕生は、当時驚くべき出来事であった。延久四（一〇七二）年十二月一日には准三宮に叙せられているが、これも前代未聞であった。実仁親王の母として、基子の格を上げる意図があったと考えられ

る。基子所生の皇子に天皇が愛情を注ぎ、五十日の祝いの席で外戚でもない師実が抱き、異母姉の聡子内親王も日頃から抱いて慈しむという行為は、実仁親王の後見として後三条院、師実、聡子内親王らが関わっていることを周囲に示威しているに等しい。(4) 五十日の祝いという対社会的な行事において、生まれたばかりの皇子を天皇と摂関家の人間が「抱く」という構図は、『紫式部日記』における敦成親王誕生記事にも共通する。(5) 実仁親王の後見が誰であるのかを、続編は語っているのである。

摂関家に対する姿勢の変化は、後冷泉院と比較するかたちで次のように言及されている。

後冷泉院は、何ごともただ③殿にまかせ申させたまへりき。後の世にこそ宇治にも籠りゐさせたまひて、「世も知らじ。ものなども奏せじ」とて、世を捨てたるやうにておはしましか、されど除目あらんとては、まづ何ごとも申させたまひ、奏せさせたまはねど、かの殿の人に、受領にてもただの司にても、よきところはなさせたまひき。同じ関白と申せど二十余りより八十までせさせたまふ。世の人靡き申し、怖ぢきこえさせたる、ことはりなり（四三四頁）。

傍線部③「殿」は藤原頼通である。後冷泉院は万事頼通任せであり、二十代から八十代まで関白にあった頼通は、世の人々に畏怖されていた。晩年こそ宇治に籠居したが、除目の際にはなお重鎮として君臨していたことが窺える。ここには後三条院が政務を摂関任せにしなかったことが語らずして語られ、同じく源基子の破格の出世についても、後冷泉院と比較がなされ、次のように述べられている。

東宮よりほかに御子もおはしまさずなどあるほどにて、誰も誰もおろかに思ひ申させたまふべきならねど、④後冷泉院にかやうのことおはしまさましかば、また御子おはしまさずとも、うけばりてかくはもてなさせたまはざらまし。人知れず、「さる人おはしますなり」などばかりこそは聞かせたまはましか。⑤宇治の関白殿にはばかり申させたまはではありなましや。御剣遣はし、上達部、殿上人参り集ひなどはえしたまはざらまし（四三一頁）。

後冷泉院は、傍線部④においてたとえ皇子がなかろうと、摂関が認知しない女性を偏愛することはなかったろうと述べられている。傍線部⑤では、後冷泉院が頼通に対して遠慮していたことが示され、御剣を遣わしたり、多くの上達部・殿上人が参集することもなかったろうと言い、後三条院の源基子に対する偏愛と、実仁親王の存在が宮中の人々に受け入れられている様が語られ、同時に後宮政策における後三条院の摂関に対する遠慮の無さも、陰画的に語られている。

次に後朱雀院との相違を見る。

⑥この内の御心いとすくよかに、世の中の乱れたらんことを直させたまはんと思しめし、制なども厳しく、末の世の帝には余りてめでたくおはします。⑦後朱雀院をすくよかにおはしますと思ひ申ししに、これはこよなくまさりたてまつらせたまへり。世人怖ぢ申したる、ことわりなり。おほかたの御もてなし、いと気高くおはしましけり。女院の申させたまふ

ことをも、さるまじきことをばさらに聞かせたまはず（四三四頁）。

傍線部⑥には、後三条院の治世が端的に纏められている。「制」とは、延久の荘園整理令や奢侈禁止令などをさす。末世の帝としては明賢であり、「すくよか」つまり堅実で剛健であったと評されている。傍線部⑦には、父の後朱雀院も「すくよか」であったが、後三条院は父帝を凌駕する気性の持ち主であったと記されている。

関白として人々に畏敬の念を抱かれていた頼通とは袂を分かっていた後三条院の姿勢は、後冷泉院や後朱雀院との比較から読みとることができる。しかし、源基子への偏愛に対する言及に顕著なように、語り手の立場は摂関家寄りの論理であり、その明賢さを評価しながらも婉曲な批判をしていると解釈できる。

では、同時代の他資料における後三条院像を検討してみよう。

岩瀬文庫本『大鏡』「二の舞の翁の物語」では、世継が「後三条院生れさせ給にしかは、されはこそ、むかしの夢はむなしかりけりや、なからんすへつたへさせ給ふへき君におはします」と発言しており、「なからんすへ」とは、三条天皇の血脈を伝える帝であることが示唆されている。天皇家の血脈の問題に言及するのは、中世の歴史書『神皇正統記』も同様で、「又三條ノ御末ヲモウケ給ヘリ。ムカシモカヽルタメシ侍キ。兩流ヲ内外ニ〈欽明天皇ノ御母手白香ノ皇女、仁賢天皇ノ御女、仁徳ノ御後也〉ウケ給テ繼體ノ主トナリマシマス」と述べ、円融系と冷泉系の二つの血脈の融合の象徴と認識している。その一方で、『愚管抄』は「九條殿ノ子孫攝籙ノカタヲハナレテ、閑院ノカタザマニ繼テイノキミノナラセ給フハジメバカリコソミユレ」と、外戚が九条流から閑院流に移ったときの天皇であったとする。いずれも天皇家の血脈に対して問題を提起したうえで、転換期の天皇像を後三条院に見出している。この認識は後世の歴史学にも与えた。

また、大江匡房の『続本朝往生伝』には、次のように記述される。

後三条天皇は後朱雀院の第二の子なり。母は陽明門院なり。九五の位を履みて一千の運に鍾り、聖化の、世に被ること、殆に承和・延喜の朝に同じ。相伝へて曰く、冷泉院の後、政執柄にあり。花山天皇の二ヶ年の間、天下大きに治まれりといへり。その後、権また相門に帰りて、皇威廃れるがごとし。ここに、天皇五ヶ年の間、初めて万機を視たまへり。俗は淳素に反りて、人は礼儀を知り、日域塗炭に及ばず。民今にその賜物を受くるの故ならくのみ。和漢の才智は、誠に古今に絶れたまひ、耆儒元老といへども、敢へて抗論せず。雷霆の威を発したまふといへども、必ず雨露の沢あり。文武共に行はれて、寛猛相済へり。太平の世、近くここに見れたり。円宗寺を作りて、初めて二会を置き、日吉の社に幸して、深く一乗に帰したまへり。禅譲の後、遂にもて世を遁れたまへり。御大漸の剋、心を専らにして乱れず、先づ念仏を修して、一旦に崩御したまへり。――中略――宇治前大相国、天皇の崩御を聞きて歎きて曰く、これ本朝不孝の甚しきなりといへり（二二六～二二七頁）。

後三条院の治世が、延喜・天暦の治、花山天皇の親政と並んで讃えられている。そして、生前の事績として、円宗寺の二会を設置と日吉神社への帰依を挙げる。匡房は、「執柄」つまり摂関家が政権を握ることをよしとせず、花山天皇以降は「皇威」が廃れたことを述べる。後三条院の和漢の才を讃える匡房は、『遊女記』でも同様のことを述べている。

長保年中、東三条院は住吉の社・天王寺に参詣したまひき。この時に禅定大相国は小観音を寵せられき。長元年中、上東門院また御行ましましき。この時に宇治大相国は中君を賞ばれき。延久年中、後三条院は同じくこの寺社に幸したまひき。狛犬・犢等の類、舟を並べて来れり。人、神仙を言へり。近代の勝事なり（一五五頁）。

後三条院が譲位後に行った石清水・天王寺・住吉御幸に言及し、上東門院彰子の御幸が引き合いに出されるが、「近代の勝事」と賞賛されていることに注意したい。匡房の後三条院礼讃は、願文の類にも見られ、その傾向は『古事談』の編纂方針にも影響しているという。[6] 匡房こそ、後三条院聖主観を確立した立役者であった。最後は頼通追悼の言葉で締め括られるが、生前の険悪な関係に鑑み、何らかの意図があるものと思われる。いずれも続編には見出されない後三条院像である。

一方で、藤原忠実の言談の聞書である『中外抄』下巻第三話には、次のような記事が見える。

予の申して云はく、「後三条院は才覚の君にて御しき。かの時、大二条殿は摂籙、匡房卿は五位の蔵人たりき。而るに、円宗寺の本の名、円明寺なりしは、如何」と。仰せて云はく、「物はさこそあれ。かくのごとく吉凶は自然出で来たる。また、しかるべき事なり。宇治殿の御難なり。「この御願は庚午の日ぞ供養せらるべかりける。見れば、関白は腹黒き人かな。かくのごとき事を申されで」と仰せられければ、後三条院、大きにはぢさせ給ひて、供養の後に円宗寺とは改められしなり。円明寺は松崎寺の名なり。松崎寺は庚午の日に供養す。不吉の例なり（三一二三～三一四頁）。

中原師元は、円宗寺の元の名称が円明寺であったことについて忠実に尋ねた。忠実は、頼通が円明寺という名が不吉であることを指摘し、それを耳にした後三条院が大いに恥じ入って、供養の後、円宗寺と名を改めたという。また、当時の関白・教通はその事情を知っていたはずなのに、後三条院に言わない「腹黒き人」であったとも忠実は述べている。続編に教通と後三条院との関係についての記述はない。ただ、石清水・天王寺・住吉御幸には教通も参加している。また、『古事談』巻一・七二話には、幼い白河院に対して教通が膝の上に座らせて後見である姿勢を見せ、後三条院を喜ばせた逸話が見える。[7] 出典は明らかではないが、教通の姿勢は後三条院に対する恭順の証であり、頼通と教通との関係が悪化していたことを踏まえると、後三条院と教通は、頼通と一線を画していた可能性がある。忠実は頼通の曾孫であり、九条流の嫡男でもある。その立場から見る教通は「腹黒き人」であり、後三条院は「才覚の君」と評され、誤りを指摘されて「円宗寺」と改めさせた英明さも語られているが、理想的な君主像とは程遠

い。頼通こそが偉大な先祖として位置づけられるのである。この態度は続編の姿勢と重なってくる。九条流の中でも、嫡流周辺の人物が続編の成立に関わっていたと考えられよう。

最後に続編と『今鏡』の後三条院関係記事を比較してみたい。続編の記事は、源基子など後宮関係と、行幸・御幸記事、師実の動向に大別できる。一方『今鏡』は、大江匡房や正家・実政・隆方など官人たちの逸話、石清水放生会、円宗寺二会の設置、法文を薬智に学んだことなどの神祇仏事関係記事、大極殿再建、行幸・御幸記事に大別できるが、不遇だった東宮時代と、頼通に後朱雀院との対面を妨害された母の陽明門院禎子内親王についても詳細に描くなど、この時期の摂関家に対して批判的に記述している。記事の選定を見ると、続編は後三条院の基子への偏愛から天皇についての語りが始まり、後三条院の誕生・元服・即位などの通過儀礼は描かず、専ら後宮の事情に比重が置かれている。『続本朝往生伝』等の大江匡房の作品群及び『古事談』では後三条院が賞揚され、『愚管抄』や『神皇正統記』では天皇家における血脈及び姻戚関係の中で転換点に位置する天皇として後三条院の存在意義が説明されている。それに対して続編及び『中外抄』は、後三条院を理想化したり、讃したりはなされない。続編では、後冷泉・後朱雀院の摂関家対策と比較され、専ら基子に対する接し方を理由に批判的な言辞が述べられており、聖帝として評価されているとは言い難い。むしろ、摂関家との協調関係を破壊した天皇として、異物としての存在感を浮き彫りにしている。次節では続編における後三条院像を更に掘り下げて検討してみたい。

三、後三条院の後宮
――『源氏物語』桐壺巻の投影と一品宮聡子内親王――

続編の後三条院像には、明らかに『源氏物語』桐壺巻が投影されている。巻三十八「松のしづえ」の冒頭は「一品宮に参りたまひし侍従宰相の御女、内思しめすといふこと世に聞えて、ただそなたになんおはしますなどいふほどに、ただならずならせたまへり」（四二五頁）と、延久二（一〇七〇）年の源基子の懐妊から始発する。前述のとおり誕生・元服・立太子・即位など、後三条院にかかわる通過儀礼は一切省筆されている。

後三条院の皇女聡子内親王は、延久元（一〇六九）年六月十九日に一品宮に叙せられたと『扶桑略記』に見える。[8] 基子は小一条院の孫で、聡子内親王に仕える女房であった。なお、康平七（一〇六四）年五月十五日に基平は従二位参議で薨じていることが『公卿補任』に見られ、父に死別した高貴な血筋の女性が宮廷に出仕するという状況も桐壺更衣の人物造型と重なる。

おほかたも宮仕へざまにもあらず、もてかしづききこえさせたまひて、ただ宮の御同じことにて、御台などまゐらすることも、姫君の御台とて、女房取りてまゐらするに、まして⑧かくさへものさせたまへば、いと心ことにもてなさせたまふ（四二五頁）。

傍線部⑧は、実仁親王を懐妊した基子に対する後三条院、もしくは聡子内親王の気遣いを述べるが、この条は桐壺巻に酷似してい

る。

あながちに御前さらずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この皇子生まれたまひて後は、⑨いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この皇子のゐたまふべきなめりと、一の皇子の女御は思し疑へり（一九頁）。

傍線部⑨では「いと心ことに」という桐壺帝の配慮が見られ、続編の後三条院の姿勢に通じるものがある。また、桐壺巻の投影は次の箇所にも見出される。

七月に尾張前司経平といふ人の家に出でさせたまふ。⑩「このたび帰りまゐらせたまはんには、更衣などにてなんおはすべき」と言ひののしる。出でさせたまふ夜は、暁までおはしまし、御供の人などのたちやすらふも、⑪昔物語の心地す。さべき睦まじき殿上人、御送りすべき宣旨ありていとめでたし。殿ばらなど、「なほ女子こそ持つべきものはあれ」などめでたまふ。⑫母北の方も良頼の中納言の女にものしたまへば、仲らひいとあてやかに、⑬昔物語の心地す（四二六頁）。

傍線部⑩では、基子に対し、出産後は更衣などに出世するのではないかと人々が口々に言い立てている様子が描かれる。ここに「更衣」という発想がおこる背景には、『源氏物語』桐壺巻があったと考えられる。ここで基子は、桐壺更衣になぞらえられる。傍線部⑪は母北の方について述べられ、『源氏物語』に桐壺更衣の母は「いにしへの人の由あるにて」（二六頁）とその高貴な血筋が窺える。この時点では既に基子の父基平が他界していたことも考え合わせると、傍線部⑪、⑬の二度繰り返される「昔物語」とは『源氏物語』を指すものと言えよう。『栄花物語標注』も桐壺巻との類似点を指摘している。[9]『源氏物語』では、桐壺帝の偏愛が「楊貴妃の例」とされ、弘徽殿女御はじめ他の后たち、周囲の人々の疑念を招き、更衣の死という悲劇的な結末に至るが、続編における後宮の様は極度に理想化され、『源氏物語』を髣髴とさせる語りは一変する。

⑭中宮、女御殿などおはしませど、女の御有様はかぎりあれば、いみじく思せども、色に出でさせたまふべきにあらず。ただ人のやうにさらぬまでもむつかしく申させたまふべきならねば、よき人と申すなかにも、⑮中宮いとあてに子めかしくおはします。後冷泉院の御時に、大宮などこそは同じことなれど、幼くより女院も一つにおほし奉らせたまひ、やむごとなくわづらはしくも思ひ申させたまふべかりしかど、それだに言に出でて申させたまふべかりしかど、それだに言に出でて申させたまふことなかりき。⑯ましてこの世は、ただ御心なり（四二二頁）。

傍線部⑭は、後三条院の後宮には、帝の愛情をほしいままにして女房から女御へと昇格した基子に対して自らを戒める后たちの姿が見える。『源氏物語』では、桐壺更衣が后たちから酷い辱めを受けたことが随所に描かれ、後宮は陰湿な虐めの場と化しているのであるが、後三条院と基子の人物造型は『源氏物語』の枠組みを借りつつも、後宮の在り方は桐壺帝の後宮のイメージが否定されている。特に「女の御有様」と明確に女性としてのあるべき姿を

提示している点は他例を見ない。それは逆説的に、基子への偏愛が常軌を逸するものであったとも読みとりうる。その中でも、道長の血を引く中宮馨子内親王は、傍線部⑮に高貴でおおらかな性格が述べられ、非の打ち所のない皇女であり中宮として位置づけられる。傍線部⑯には、「ましてこの世は、ただ御心なり」と、後冷泉朝と相違して誰も後三条院の基子への愛情を止めることができなかったとされている。聡明な後宮の后たちの高潔さと、自己の感情を止められない後三条院の性情は、あまりに対照的である。

既に『源氏物語』研究において言及されているように、桐壺巻における桐壺帝は、素晴らしい帝として描かれてはいない。[10] 桐壺更衣を愛する余りに、他の后達をないがしろにし、そのために後宮の空気も険悪なものとなり、弘徽殿女御に苦言を呈され、それに加え周囲の冷淡な眼差しに囲まれていた。桐壺帝の投影は、続編において決して良い意味で用いられてはいないと考えられる。基子に関する叙述も中宮馨子内親王とは位相差がある。特に延久三（一〇七一）年八月に行われた新造内裏還幸記事においては、中宮の容貌と気性が「御かたち、御心めでたくおはします」とされ、その華々しい様子が強調されるが（四四〇頁）、基子についての言及はなされていない。そして直後にある基子の再度の懐妊記事は簡潔に纏められており、続編の関心事は基子ではないことが露呈されている。

そして後宮には、基子のかつての主人であった聡子内親王がいた。前節で言及したように、聡子内親王は実仁親王の後見のごとく登場する。巻四十「紫野」の実仁親王薨去記事でも、悲嘆に暮れる人々の中に聡子内親王の名も見える（五一四頁）。続編には描かれていないが、『続詞花集』の詞書に「大教院の一品宮天王寺にまうて給けるに御ともの人々すみよしにまいりて歌よみけるに」（神祇・三七一・藤原道経）とあり、後三条院崩御後、聡子内親王は仁和寺に入っていた。また、『中右記』寛治六（一〇九二）年二月三日条に「今夜又一品宮、女御殿并三宮遷御二条烏丸故關白舊亭云々」とあり、聡子内親王、源基子、輔仁親王が故藤原師通邸に遷御したとある。[11] 輔仁親王は基子腹の皇子であり、実仁親王の同母弟である。親王が仁寛事件で失脚するまで、白河院がその存在に脅かされ続けたことは周知のとおりである。後三条院崩御後も聡子内親王が基子や輔仁親王と行動を共にしていたことから、聡子内親王が基子・実仁・輔仁の後見役を担っていたことが推測できる。しかし、聡子内親王が宮廷内でどのような位置にあったのか、またどれほどの存在感があったのかは不明である。巻三十八では、その存在がクローズアップされるが、他の史料等に聡子内親王の政治的且つ具体的な動向を確認することはできない。ただし、白河院と同母姉でありながら、実仁・輔仁の後見となっていることが、続編では大きく取り上げられることに注意したい。後三条院は自らの王統の後継者として実仁親王を強く推していた。[12] その後見を聡子内親王が担う背後には、当然後三条院の意志があったと考えられる。故に、後三条院はその後宮政策に、聡子内親王を加担させたと続編の作者は認識しているのである。

聡子内親王は、後に後三条院・陽明門院とともに石清水・天王

寺・住吉御幸に同行する。源基子は同行せず、近臣のみを引き連れての御幸に聡子内親王を参加させたことは、後三条院の聡子内親王に対する信頼感の証であり、続編は後三条院後宮の関係図と後宮政策の一環として基子・聡子内親王を一つの勢力として認識している。

四、石清水・天王寺・住吉御幸の構造

後三条院は譲位の後、石清水・天王寺・住吉に御幸した。続編巻三十八において最も筆が割かれる記事であり、巻名「松のしづえ」が御幸の折の源経信の詠にちなむものであることをも考えると、後三条院の最大の事績はこの御幸であったと、続編の作者は認識していたものと考えられる。

史料を見る限り、石清水・天王寺・住吉への御幸の挙行回数は限られている。長保二（一〇〇〇）年三月二十日の東三条院詮子の御幸、長元四（一〇三一）年九月二十五日の上東門院彰子の御幸がある程度であり、他に応徳三（一〇八六）年九月、応徳元（一〇八四）年八月十二日の太皇太后藤原寛子の行啓（師実夫妻も供奉）が見出される程度である。[13] ところが続編において、御幸は二度描かれる。正編に東三条院の御幸は具体的に描かれないが、上東門院の御幸は巻三十一「殿上の花見」に華々しく記されている。当初同行したのは「院の人々」であったが、住吉参詣からは関白頼通と内大臣教通兄弟が供奉し、詠まれた和歌も十六首ある。頼通、教通のほか伊勢大輔、弁の乳母、小弁、武蔵、兵衛の内侍、弁の内侍、弁の命婦が詠者として名を連ね、上東門院と同腹の兄弟及び女房達の歌のみが列挙されることを踏まえると、身内意識の強い御幸として描かれている。

一方、後三条院の御幸は、その旅程を見ると後三条院や上東門院の御幸を強く意識したものであり、また四十五首に及ぶ詠歌は「院政期歌壇の出発点」であったとも評されている。[14] また、一つの記事においてこれほどの数の和歌が詠まれ、記録されているのは、正編・続編を通じてこの箇所だけである。続編収載の和歌については、資料的意味合いが強いことが既に言及されているが、なぜ省筆せずに大規模な和歌行事をそのまま記載したのか、その意義を問う必要がある。[15]

この御幸について続編は、陽明門院禎子内親王、一品宮聡子内親王、そして「睦ましく思しめす人々」等と同行させたと述べ（四四七頁）、後三条院に近しい人々が供奉したことを示す。関白教通も同行している。

しかし、ここで詠まれた四十五首の中に、陽明門院禎子内親王や聡子内親王の詠はない。

詠者は後三条院をはじめ、関白藤原教通、藤原能長、藤原資仲、源経信、源隆綱、藤原伊房、藤原実季、藤原公基、源信宗、藤原経平、藤原実政、藤原資宗、源家賢、源政長、藤原通家、源季宗、高階経成、源師賢、大江匡房、藤原通俊、藤原頭実、因幡守忠季、藤原資清、藤原俊範、藤原為房、橘俊宗に加え、同行の女房達となる。女房達の名は明かされていない。井上宗雄はこれらの歌人達が摂関家の束縛から解き放たれて後三条院の御幸に参加したことの意義を指摘している。[16] 膨大な和歌の列挙は、健康状態が悪化

しているとはいえ、譲位後の後三条院の権力を示している。この時、後三条院は新帝白河院、皇太弟実仁親王という、九条流藤原氏の血を排除した自らを始祖とする王統を確立したのである。そして、この御幸に小一条院の流れをくみ、実仁・輔仁の二人の皇子をなした源基子を同行させず、また御幸和歌及びその旅程においても陽明門院禎子内親王と聡子内親王の詠が見当たらないことは、御幸和歌記事の叙述の目的が基子並びに陽明門院、聡子内親王を描くことではないことを示す。

御幸和歌において、藤原為房は

ふたかたにかかる御幸を住吉の松めづらしく神も見るらん

と詠じている（四五五頁）。「ふたかた」とは『栄花物語詳解』が指摘するとおり、後三条院と陽明門院をさす。[17] 後三条院と陽明門院の二人を言祝ぐ和歌は、為房の詠のみである。御幸和歌そのものの眼目は、後三条院親子の紐帯を賞揚することにあった可能性は十分考えられるが、その他の和歌にはこのような傾向は見いだせず、続編の編集傾向としてはこれを重視していないことが窺える。

それに対して上東門院彰子の御幸の場合、女院は歌会で和歌を詠じた記述はないが、亀井の水のもとで和歌を詠んだことが巻三十一「殿上の花見」に記載されており、御幸記事に存在感を与えている（二〇九頁）。そして道長の子供達と女房達を中心に詠者が構成されていることを踏まえると、延久御幸和歌における歌風や歌人の構成、そして基子の不在は、摂関家との血縁関係支えられた上東門院の御幸とは異なる新たな時代の到来を主張するものであったと続編の作者は認識し、後冷泉朝以前の王朝とは異なる後三条朝の在り方を御幸和歌記事に反映させたと言える。付け加えると、他の史料にも源基子が同行したという記述はなく、基子の身内である信宗と季宗の二人が詠者として参加している。

詠者を仔細に見ると、後三条院聖主観を創出した大江匡房が名を連ね、宇多源氏が四人（資仲、経平、資宗、通家、通俊、顕実）含まれることに注意したい。後三条院の御幸がどの勢力によって支えられていたのか、その構造が明らかにされる。後藤祥子は、『八雲御抄』において問題とされた経信詠の祝意性のなさを踏まえ、御幸和歌の全体的な傾向を分析した上で、宇多源氏の人々の詠ついて、自由な行旅述懐歌を追求する姿勢と、御幸和歌の気韻をこめる効果を狙う目的とがあったことを指摘する。[18] ここでは和歌の具体的な表現形態に触れる紙幅はないが、後三条院に近しい人々が斬新な手法で御幸和歌を詠じていることは興味深い。

後三条院は帰洛後に崩御する。後三条院の長寿を歌った人々の願いは潰えたことを続編は見据え、同時に、御幸そのものに、後三条院を支えた人間関係とその構造をとらえている。後三条院の死の直前に、その政権がどのような人々によって支えられているかを暴露し、彼らが願わくは今後も自分が作り上げた王統を担わんことを自身祈念する旅としても、この御幸がそのような解釈が可能であるかのように描かれているのである。これは極めて政治的な叙述といえる。

五、おわりに

『栄花物語』続編は、後三条院の後宮政策と御幸に力点を置いて詳細に記述されており、院に対して批判的であるという点で、他の作品と差異が認められる。共時的にみて、特に大江匡房の後三条院聖主観と一線を画し、『中外抄』の藤原忠実の言と似通った立場で記されている。このことは、少なくとも続編の巻三十八「松のしづえ」が、九条家嫡流周辺の人物による執筆である可能性を示唆していよう。中世になると、皇統の血脈上の転換点を後三条院に見る視点が『愚管抄』『神皇正統記』に見出される。『今鏡』『古事談』は、後三条院聖主観を受け継いでいる。続編は後三条院の後宮政策と御幸に政治的意義を見出す。後宮政策とは皇統に直結する問題であり、『愚管抄』『神皇正統記』の後三条院像は、続編の視点の延長上に位置しているといえる。

続編における『源氏物語』桐壺巻ならびに後三条院に対する桐壺帝像の投影は、源基子への寵愛を始めとする後宮政策への批判と解釈できる。後宮内では注目されてこなかった一品宮聡子内親王に焦点をあて、師実とともに実仁親王を後見する立場であったことを、親王を「抱く」という行為に象徴させて図式的に叙述していること、さらに御幸和歌の詠者の名の列挙は御幸が後三条朝の権力構造の表象であることを示し、後三条院の相貌を摂関家と天皇家との協調関係を崩した異質な王として造型している。つまり、この叙述方法は、摂関家側の視点から政治史を語るテクストの形成を意味する。これに対して匡房の打ち出した後三条院聖主観は、摂関家側の言説に対する思想的な挑戦であった。

注(1) 川端善明、荒木浩『古事談　続古事談』新日本古典大系 2005/8 七七、七九、八九頁参照。頼通が「末代の賢主」と発言したことは、大江匡房の『続本朝往生伝』の影響があろう。小峯和明『院政期文学論』2006/1 六二三～六二五頁参照。また、坂本賞三は後三条聖代観が自明のものとされることに対して反論している。坂本賞三『藤原頼通の時代』平凡社選書 1991/5 一一四～一一四参照。

(2) 新全集頭注四六一頁参照。成立論については池田尚隆「栄花物語続篇の構成―原資料と成立をめぐって―」『栄花物語研究　第一集』山中裕編　国書刊行会 1985/9 参照。続編が天皇の治世に焦点が当てられていることを論じたものは、福長進「『栄花物語』続編について」『新　栄花物語研究』山中裕編　風間書房 2002/10 が挙げられる。

(3) 新全集頭注四六一頁参照。

(4) 立石和弘「抱擁と童名―『うつほ物語』心性の生育儀礼―」『生育儀礼の歴史と文化』服藤早苗・小島菜温子編　森話社 2003/3 参照。

(5) 前掲注（4）立石論文参照。中野幸一編『紫式部日記』武蔵野書院 2002/3 三四頁参照。

(6) 前掲注（1）小峯論文二三三頁参照。

(7) 前掲注（1）『古事談　続古事談』九〇頁参照。

(8) 新訂増補国史大系参照。

(9) 本位田重美　清水彰編『住吉大社蔵　佐野久成著　栄花物語標注下』笠間書院 1982/5 四一二頁参照。

(10) 日向一雅「桐壺帝の物語の方法―源氏物語の准拠をめぐって」『国語と国文学』1998/1、藤井貞和「桐壺院の生と死」『源氏物語作中人物論集』1993/1 など参照。

(11) 増補史料大成『中右記』参照。

(12) 保立道久『平安王朝』岩波新書 1996/11 参照。
(13) 大日本古記録『権記』、『御堂関白記』、新訂増補『日本紀略』、『百錬抄』長保二年三月二十日の条、大日本古記録『小右記』、『左経記』、新訂増補国史大系『百錬抄』、『日本紀略』、『扶桑略記』長元四年九月二十五日の条、史料総攬『歴代編年集成』応徳三年八月十二日の条、大日本古記録『後二条師通記』、新訂増補国史大系『扶桑略記』、『百錬抄』応徳元年九月十四日の条参照。
(14) 井上宗雄「院政期歌壇の考察――延久より久寿に至る」『国文学研究』1959/3 参照。
(15) 中村康夫「栄花物語の和歌」歴史物語講座刊行委員会編『歴史物語講座 栄花物語』風間書房 1999/5 一二〇頁参照。
(16) 注(14)前掲井上論文参照。
(17) 和田英松『栄花物語詳解』明治書院 1906/12 八七頁参照。
(18) 後藤祥子「管弦者の和歌――延久五年住吉御幸和歌の場合――」『日本女子大学紀要 文学部』1971/3 参照。

＊なお、引用の各作品の本文を以下に掲げる。
松村博司校注『大鏡』1964/1 岩波文庫 1964/1 三〇七頁、岩佐正・時枝誠記・木藤才蔵校注『神皇正統記 増鏡』日本古典文学大系 1965/2 一四〇～一四一頁、岡見正雄・赤松俊秀校注『愚管抄』日本古典文学大系 1967/1 一九三頁、井上光貞・大曾根章介校注『往生伝 法華験記』岩波書店 1974/9、山岸徳平・竹内理三・家永三郎・大曾根章介校注「遊女記」『古代中世社会思想』日本思想大系 1994/1、後藤昭雄、池上洵一、山根對助校注『江談抄 中外抄 富家語』新日本古典文学大系 1997/6、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注『源氏物語①』新日本古典文学全集 1994/3 参照。

新刊紹介

三田村雅子著『草木のなびき、心の揺らぎ 源氏物語絵巻を読み直す』

本書は、『源氏物語』をテクストとして読むことの第一人者たる著者が、源氏物語絵巻においてその才を発揮した一冊である。

第一章と第二章では、絵巻に描かれた植物や調度・衣装に注目する。それらがいかに登場人物の心情を象徴しているか、あるいは物語の展開を暗示しているか、ということを読んでいく。続く第三章と第四章では人物を中心に論じている。第三章では特に女房をとりあげて、絵巻の構成において、女房が描かれる意味やその描かれ方の意味を捉えている。第四章ではそれらを活かしながら制作の現場についても言及していく。

ともあれ本書は、源氏物語絵巻の問題だけでなく、テクストを「読む」こととは何かという大きな問題の答えにもなりうる一冊であろう。また著者には三谷邦明氏との共著『源氏物語絵巻の謎を読み解く』(一九九八年 角川選書)もあるのでぜひ参照されたい。

(二〇〇六年三月 フェリス女学院大学 新書判 一九〇頁 税込七三五円)

〔新井 隆〕